

ンスの話で、パブリシヤスのお金を使って失敗はしてはいけないというところ、一般の私立のプロジェクトと違うというお話があったんですが、これはパブリックという意味なんですか、それともプライベートという意味の私立でおっしゃっていますか。

あと2点ほどあるんですけど、教えてください。

州やEU、一般企業からの、お金を集めるときに、連邦政府はお金を出さなかったという意味の圧力があつたとおっしゃったんですけど、この圧力という意味が何かわからないので教えてください。

もう一つ、フォトルタイン型のソーラーでいいんですか、不勉強でわからないんですけど、このことは何かを教えてください。

この3つ教えてください。

○説明者 1番目なんですけど、これは私の方です。エッセン市ではありません。

2番目、パブリシヤスな、公のお金で立ち上がっているというか、公のお金のみででき上がったプロジェクトと言いましたけれども、これ、もうちょっと内訳を、先ほどのときに言えばよかったですね、まず、一般からの投資が30%強ですね。それから、EU基金からは30%、それから、25%が州から出ております。その残り、ほぼ5%、あるいは5%以下になるんですけども、これが連邦政府になります。ですから、連邦政府から全くもらわなかったというような言い方をしましたけど、このパーセンテージから見れば、ほとんどもらっていないようなものなので、そういう言い方をしたんですけども。州政府の方の方からお金をもらわなかったら圧力が加かったということではなくて、やはりすべて、例えば自分の自治体で、これこれでお金があるから、これだけ投資しようというようなことがあつたわけではないので、そういう意味では、すべて公共のお金ですよ、ほとんど。プライベートの企業さんの投資は別として。要するに、圧力というか時間がないと。10年間で、とにかく、これを終わらせなきゃいけない。このいただいたお金で、10年計画で終わらせなきゃいけない。そういう意味でおしりに火がついたと言った方が、わかりやすいかもしれないです。

次ね、フォトルタイプの技術的な説明をする前に、簡単にソーラーシステムについて説明させてください。

大きく言って、ソーラーシステムというのは2つがあります。1つは、先ほどのパッシブ型で、これが構造がよく見えるものです。上が全部ガラス張りになっているわけです。何のテクノロジーも要することなく、これは設計のアイデアでもって、なるべく自然な熱を入れようと。その際の熱なんですけれども、人工的に温めた暖房的な熱ではなくて、非常に自然な肌心地がいいと言われるようなものです。ちなみに、この建物はヘルネ市というまちにあるんですけども、このヘルネ市では、家の中はほとんどニースにいるような、温かい南フランスのような温度を保っているということです。かなりこれでもって暖房コストが節約

されます。

これ、小さくて見にくいかもしれないんですけども、実はこの中に幾つか店舗があるんです。規模が170メートルで、長さが170メートル、そして間口が70メートルという非常に大きな規模なんです。大きな規模にもかかわらず、室内の暖房、真冬なんかは、50%ほど、パッシブソーラーシステムで賄えるということです。これがまず1つ目のソーラーシステムです。

もう一つは、パッシブの反対です。今度はアクティブソーラーシステムになります。太陽光を利用して、そこから電気をつくる、電気製造をするというシステムです。ソーラー板なんですけれども、これは小さなセルから成り立っているのがよくわかると思います。太陽光をまず吸収して、そして同時に、吸収したエネルギーを電気に変えていくわけなんですけれども、普通、フォトル（光電池）タイプ式のソーラー板ですと、学術パークが建ったころには15%ぐらいの電気の製造量だったんですけど、今では19%ぐらいと、4%ほど、製造率が上がっております。

ですから、2番目のフォトルタイプ式のソーラーエネルギーというのは最も近代的で、そして最も新しいものなんです。もちろんエコロジーでハイテクという。ただ、残念ながら、今のところ、非常に高いです。

そういう意味では、ハイテクソーラーシステムに関しましては、途上の過程はもう過ぎていきましたけれども、まだまだです。ですから、ドイツ全国の一般家屋あるいは建築物の屋根の上に50%ほど、このすばらしい高いソーラー板がついているかということ、現実にはそうではないということがあります。

○土師議員 きょうは、実際、ツォルフェライン炭鉱、これを見まして、スケール感に圧倒させられました。堺市も、戦後、臨海工業地帯がございまして、今、構造転換、産業の構造転換しております。そこで3つの質問を申し上げます。

まず1つ目ですけれども、組織、非常によくわかりました。しかしながら、この10年計画の前の段階ですね。後のお話はずっと組織もよくわかったんですけども、前の段階で、火つけ役というんでしょうか、皮切り役というんでしょうか、どのような動きがあったのかというのが1つ。

2つ目は、我々、議会で、きょうは参っているわけなんですけれども、議会の役割、政治の役割というんでしょうか、経済が、いわゆる経済界の方が補助的、司会者的な役割ということで振興したわけですけども、日本の場合は、ヨーロッパと政治と役割が違うかもわかりませんが、政治の役割、議会の役割がどのようにあったのか。

最後申し上げます。年間動員数ですね、きょうもたくさんの方がお見えになっていらっしゃるんですけども、今後の、ふえていくと思うんですけども、どれぐらいの、要するに年間動員数ですね、我々視察で今来ていると思うんですけど、観光資源として、どんなふう

にお考えなんですか。

○説明者 それは、一般の観光者というか、見たいよという人も含めた数でいいですか。

○土師議員 そうですね、エンドユーザーですね、観光資源として、どういう可能性を描かれているのか、その3つのことに対して教えていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○説明者 このプロジェクトが始まる前はどうかだったのかといいますと、例えばコークス工場というのが、このあたりに点々としていまして、その近くに住んでいる人は、やっぱりくさいですし、体に悪いですし、ぜんそくになりますし、退去したいんです。ところが、お金のあつた人は退去して、どんどんどんどんほかのところに、もうちょっと住環境のいいところに行つたんですけれど、お金のない人はいまだにそこにいたわけです。じゃあ、何も政治的な動きはなかったのかというと、そうではないんですね。緑の党というのがありまして、これは環境党なんですけれど、緑の党によって、あちこちで植樹をしたり、それから河川のフィルター導入、なるべくきれいな河川に戻そうというような運動、そういった政策というのはありました。

ただ実際に人口の推移はどうかといいますと、このエッセン市、それから、もう一つ同じような規模で、ドルトムントというまたすごく汚いまちがあるんですけれど、このエッセンとドルトムントで、年間10%ほどの人口が目減りしていったというのが実情です。ということは、その前ぐらいまでは、前までぐらいというのは、80年代ですが、これはエッセン市の人口は70万を超えていたということになります。ちなみに、現在では61万人ということになります。

そういうふうになりますと、当然、人口が減るということは自治体の税収が減ることです。実際の税収が減るということは、インフラに全くお金がかからない道路工事、それから学校、それから一般の公共施設の改修工事、こういうことが一切できないといったことになるわけです。そして、そこでまた悪循環が生じて、そういうまちだったら、やっぱりほかのどこに行こうじゃないかという悪い状況が続いていたわけです。

先ほど申し上げましたように、緑の党のおかげで、グルーガ公園とか、バルデナイ湖という非常にきれいな湖があるんですけれど。

グルーガ公園、これが非常に早くて、それから、あと、バルデナイ湖、このあたりの景観づくりというのもあったんですけれども、何といたってもエッセンの我々がいますところ、エッセン北、一番そういった環境が貧しい、環境には乏しいところだったんです。ですから、当時の昔のプロジェクトに比べて、IBAの大きなプロジェクトの違いというのは、本当に一番汚かったところ、エッセンの北を中心にしていたところからプロジェクトを進めたという大きな特徴があります。

これは本当にいい質問で、実は委員会がありますね、この真ん中のとこ、最高委員会、こ

この委員会のメンバーというのが、実は市になってくるわけです。つまりIBAの方からこういうアイデアがあります。おたくのどここの市でこういうプロジェクトがあったらいいと市民は言っていますよ。要するに市はアイデアを受ける立場になってくるわけです。先ほど言ったように、ここで最終決定が行われていきますので、もちろんIBAとしては、いろいろなサポート的な役、あるいは監査とってはあれなんですけれど、一応クオリティーを保つために全く手放しにしているわけではないんですけど、基本的にはこの機関で決定してもらいますので、市の職員さん、あるいはやはり一番大切なのは、市の協議会等で協議されて、そしてそれがNGになるか、オーケーになるかというふうに決定されるわけです。

それから、もちろん大切なのは、市の方に、おたくの市民たちはこういうものが欲しいという、それとは逆の構図で、市の方からやはりうちの市にこういうのがあればいいなというふうな申し立てをしてきたというの、逆に当然たくさんあるわけです。

大切なのは、何度も言うようですが、IBAという機関は、形にすると、丸いテーブルの周りに市なり一般市民なり企業さんなりに並んでいただいて、こうこうこういうものをつくりたいんだけど、こういった面で、例えばソーラーシステムで、専門家と言われるような建築事務所はありますかなんていうことを聞かれると、わかりました、それを聞いてみましょう。このあたりと、このくらいのお金が足りない、もうちょっと何か抽出してもらえればと。わかりました。州に電話してみましょ。そういう役割をしたのが我々の機関ということになってまいります。ですから、そういう意味では、逆に言うと、市あるいは市議会、そういったものは逆に舞台をつくってくれた人たちというふうな形にもとれます。

○土師議員 観光資源としての年間動員数はどのくらいでしょうか。

○説明者 まずですね、ツォルフラインだけなんですけど、去年の年間、我々のような訪問客も含めて、何と86万人ですね。これはすごく大きな数です。

○土師議員 昨年度だけでしょうか。

○説明者 昨年度だけです。というのは、まず人口からすると、このまちを上回っています。それから、IBA計画、いろんな公園だったり、それから、我々のような歴史的建造物を見せているところがあるんですけども、そういったすべてのIBAのプロジェクトの動員数というと、99年までの統計というと、ちょっと変な統計になるんですけども、IBA全体で100万人という、この7年間ぐらいで物すごい数ということになります。もうちょっとしたら、ことしあたりはツォルフラインだけで100万人を超しちゃうかもしれないですね、うまくいけば。

まず、ルール工業地帯の歴史を見ようとすると、最初に人が来るのはここです。そういった意味もあって、86万人という膨大な訪問者の数になってまいります。

エッセンは、実は2010年、あと数年先になるんですけど、カルチャーシテイという大きなカルチャーの催しがいろんなところで行われるんです。ですから、いろんな人がどう

いうまちなんだろう。エッセンってどういうところなんだろうという形で興味を持っているという事実もあります。

もう一つは、エッセンというのは、昔から非常に有名人が住んでおりまして、その中でもだれが一番有名かといいますと、アルフレッド・クルップ、いわゆる鉄鋼ですね、これは、もともとは武器じゃなくて、スクリュウとかつくっていたんですけど、鉄鋼が要るわけです。この鉄鋼の大邸宅というのが、リラ・フルーゲルという大邸宅がエッセンの山の上の方にありまして、人が見ることもできるんですけども。そのアルフレッド・クルップの母体をまたエッセンに取り戻してこようじゃないかということで、200ヘクタールの広大な敷地を使ったアルフレッド・クルップを記念した建物を建てようじゃないかという計画もあります。そういったこともあって、周りも興味を持っている、興味津々だというものもありますし、実際、エッセンの市の中でも新しい動きがあります。

それから、もう一つ、カルチャーシティとして大切なんですけども、フォルクバンク美術館という美術館があります。これは芸術を見せる美術館ということになってくるわけなんですけれども、今、新しく建て替えられておりまして、まだでき上がっていないんですけども、5,500万ユーロを投資したすばらしい最新の美術館ができ上がる予定です。

そんなお金は、じゃあどこから出てきたんだということになるんですけども、これはプライベートな市の財団、先ほど言ったアルフレッド・クルップ財団というのがあるんです。ここからお金を持ってきたわけです。

こういったもろもろの付随的なもので、直接IBAの計画とは何も関係ないんですけど、それがきっかけとなって、あちこちに火の粉が散って行って、そしてポジティブに展開していったという現状ですね、今のところ。

そして、この州に限らず、ドイツはそうなんですけれども、中小企業が、何といても中心なんです。大手のメジャープレーヤーというのは本当に少なく、中小企業、このあたりでも、従業員数が100人から300人ほどの規模の会社というのが集中しているわけです。そこに勤めている家族の人というのは、やっぱりここにこういうのがあったらいいわねということになってくるわけですね、幼稚園にしても、学校にしても、それから生活面にしても。ということで、まちづくりが活性化してくるという非常にいい傾向に展開しております。

例えばいい例で、このすぐ近くにデュッセルドルフというまちがあるんですけど、日本の企業がヨーロッパに進出しようとなった場合、今、普通は大抵デュッセルドルフに参ります。なぜかという、幼稚園から学校まで、それから日本食も買える、そういったいい住環境が、家族の者にとって、楽だと、いいわ、便利だわという住環境があるからです。

ですから、ファイナンス、お金の面とかそういうことばかり見ていると、どうしても経済、経済と先走りになってくるんですけど、実は人間が住むには、いかに文化とか便利さとか、そういったいろいろなもろもろのお金やらでは、なかなか買えないものが重要なのか

というのがよくわかります。

○水谷議員 100万人の方が来られる交通手段は何なんですか、ここへ来られるのは。電車とかですか。

○説明者 この地域に限らず、ドイツ人は、通勤するのに、8割ほどが車を使っているという統計が出ております。ですから、この自治体も同じようなことが確実に言えます。

一般の公共の交通機関もありませんかということになるんですけども、ルール地方というのは、全部で53の自治体があるんですね。ということは、それぞれの自治体のもとで、バス会社があり、路面電車の会社があるということで、区間区間で、やっぱり経営が途切れてしまうので、これが一般の市民にとっては、何だ、面倒くさいなということになってくるわけです。それが、やはりどうしても、ドイツでは一般の自家用車で通勤する人が多いという理由なんではないかと。

○池田議員 歴史的経緯の中で、文化遺産の要素であるバウハウスの建築様式、なぜ炭鉱のまちだったところに、そのような建築様式が取り入れられたのか。日本だったら機能的なものを優先して、余りそういうものには関知しないことが多いと思うんですけども、なぜそういうことができたのでしょうか。

○説明者 まず、この炭鉱なんですけど、1928年から32年という、かなり長年にかけて建てられた炭鉱なんです。そのときの世界的な経済を、皆さん、ちょっと思い出してください。どこでも恐慌があって経済危機の時期なんですね、ということは、当然、こんな炭鉱でも人減らしをしなければいけないということで、1,500人から300人に人減らしが行われました。人減らしをしても、採掘量がもうちょっと高めたいということだったんですけど、それには、やはりかなり高い技術を駆使した炭鉱でなければなりませんでした。

この炭鉱を建てた会社というのは、これはもともと鉄鋼会社なんですね。めちゃくちゃ大きなコンツェルンです。25万人という信じられないほどの従業員を抱えたコンツェルンで、お金はあったんですね、企業自体は。そこで、人減らしをしても、採掘量は世界一を誇るものをつくっちゃったわけです。

○西議員 先ほどから12年の計画を10年で進めなければいけなかったという。その10年という数字はどこから来ているのかということをお教えくださいというのが1つです。

それから、まず、まちのイメージをこういうふうにしたらいんじゃないですかみたいなお話があったかと思うんですが、例えばIBAエムシャーパーク構想が生まれたときに、この年は一体何をメインコンセプトとしてエッジを立たせようとしたのかということも教えていただきたい。それは例えば産業遺産を観光都市として残そうとしたのか、それとも例えば、どちらかという外部から受け入れるというよりは、内発的でサステイナブルで、例えば先ほどおっしゃられたような住みやすい環境の都市をめざしたのか、何に対してエッジを立てようとしたのかということも教えていただきたいというところがあり

ます。

数多くなりますけれども、なぜ連邦政府のお金が出なかったのかということをもし一言でおっしゃるのであれば、簡単でいいんで教えていただきたい。

例えばEUのお金がたくさん出ているということですが、エコロジー都市という意味ではかなり進んだモデルを導入されているとお聞きをしておりますけれども、そうすると、突出したモデルをつくるためにEUからお金が出ていたのか、それともこの都市か、なぜ突出したモデルをつくることに補助金がたくさん出ることが許されたのかどうかということを知りたいんです。

○説明者 EU基金から、なぜここにそんなにお金が流れたかということでもいいですか。

○西議員 結構です。突出したモデルが形成をされているような気がするんですが、そこまで補助金が投下をされた理由ということですね。

それから、司会者的な役割とおっしゃられましたけども、これはインセンティブな施策の導入というふうに、司会者的な政策、役割が必要だとおっしゃられているのは、例えばヤブ一的な、紹介をするという意味で司会的な役割するということなのか、それはどういう意味で司会者的な役割なんでしょうか。

○説明者 あるいは逆に指導権が残るというか、イニシアチブとるというような形かどうか。

○西議員 そういうことです。インセンティブを導入した自治体がとったから、これは司会者的な役割だとおっしゃっているのか、そのところを少し教えていただきたいということと、あと、もう一つ、住管理のマネジメントということが、非常に重要になってくると思うんです。というのは、炭鉱都市であった場合、非常に単層的なまちであるはずなんですけど、こういうふうに複雑なまちになってくると、単層的なまちから、いろんなタイプの人がいるようなまちに急激に変化をしたと思うんですけれども。日本でいうと自治会ですけれども、多様な人たちに対する自治会対応というのはどのようにされておられるのかということです。

多様な人、単層じゃなくて、どちらかといえば多様な人たちに急激に変化をしたと思うんですけれども、そのマネジメントというののどのようにされてきたのかなど。労働者環境であれば単層なマネジメントになりますよね、それがいろんな人たちが入ってくることによって、多様なマネジメントに変化をしていくということになると思うんですが、それはどういうふうなノウハウを投入されたのかということをお簡単にいいんで教えてください。

○説明者 まず1番目なんですけど、これは簡単です。日本と大分労働問題、労働環境なんかも違ってまいりまして、普通、ドイツでやると、このくらいの時間がかかるというのが目安です。

ただし今言ったのは、先ほど、確かに12年、普通はこのくらいの規模のプロジェクトだと12年ですよと言いましたけれども、小さなプロジェクトだったならば8年ぐらい。8年から12年というのが、従来までの、これに匹敵するプロジェクトの計画年度だったという